

## 説教 『 おお、婦人よ、あなたの信仰は広大だ 』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 15章21節～28節

<sup>21</sup> イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。<sup>22</sup> すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。<sup>23</sup> しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」<sup>24</sup> イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにはか遣わされていない」とお答えになった。<sup>25</sup> しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。<sup>26</sup> イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、<sup>27</sup> 女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」<sup>28</sup> そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

主イエスの伝道の中心舞台は、ガリラヤ湖畔でした。マタイ福音書では、4章から18章にかけて、そこでの主イエスの業と言葉が記述されています。その点で、マタイ15:21-39において、その内容と共に、主イエスの足跡は異彩を放っています。

マタイ福音書15:21――

イエスはそこ（ガリラヤ湖畔）をたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。

マタイ福音書15:29――

イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。

マタイ福音書15:39――

イエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダン地方に行かれた。

このように、主イエスはガリラヤ湖畔を拠点に、他の地方へも出かけられました。ティルスとシドンは、ガリラヤ湖の北西、地中海沿いの町で、ユダヤと外地（フェニキア）の国境に当たります。また、マガダン地方は不詳ですが、一説にはガリラヤ湖の東南岸から奥地に入った所かと

言われています。

新しい場所、伝道の開拓地を駆け巡りながら、主イエスの熱心な働きは続いています。一見、伝道は平穩に進んでいったように思われますが、ガリラヤ地方を出入りする主イエスと人との出会いの中に、画期的な節目、すなわち、驚くべき伝道の拡張があることに注目しましょう。

マタイ15:21-39内の後半（:29-39）、パンと魚の奇跡を中心とする場面では、「群衆」（:30,31,32,35,36,39 また:33の同義語「大勢の人」）という語が際立っています。主イエスにつき従う人が、これほど急激に増えていったことを告げる個所は珍しいでしょう。

ここでの主イエスの足取りの起点が、異邦の地「ティルスとシドン」であると同時に、「群衆は……イスラエルの神を賛美した」（15:31 異邦人は先にイスラエルの民が選ばれた神の大きな救いの計画を受け入れていることを示している）や「もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない」（15:32 ティルス・シドンから主イエスと同行する旅が続いていることを示している）との言葉から、「群衆」には大勢の異邦人が含まれていたと推察されます。

そうだとすると、これほど急激に増えていった信仰の実りの中に、異邦人伝道の成果があった、そしてそれは、キリスト教がユダヤの地から全世界に広がっていく画期的な節目であった、と言えましょう。なるほど、異邦人伝道の先駆けとしては、マタイ福音書8:5-13に記録されている通り、主イエスが（ローマ人と見られる）百人隊長の僕しもべの中風を癒されたという出来事があります。しかし、それは、ユダヤの領内、湖畔のカファルナウムで起こったことでした。

さて、マタイ15:21-39内の前半（:21-28）から後半（:29-39）へという展開において、ユダヤ人領内から異邦人世界へという伝道の節目が刻まれていることを確認しましたが、そこには、今一つ刮目に値する画期的な節目があります。それは、一人から大勢・群衆へということなのです。

主イエスは、失われた一匹の羊を探し求める神（マタイ18:12）です。主は、「小さな者が一人でも滅びること」（マタイ18:14）を嘆き悲しまれます。主イエスのまなざしは、「群衆」に対し十把一絡げじっばひとからに向けられているのではなく、あくまでも一人ひとりの上に注がれています。

ユダヤ人伝道に専心されていた主イエスご自身、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」（マタイ15:24）と答えられましたが、その伝統的な境界は、一人の異邦の女との出会いによって突破されました。主にあって、伝道が新しくなった、伝道に新鮮な息吹が吹き込まれたのです。それは、「おお、婦人よ」（マタイ15:28）と、主イエスの驚きの声を上げられるほどの展開でした。そして、それは、今日の私たちの教会の伝道においても、そのような新しさや驚きの無い伝道はあり得ないということでありましょう。

マタイ福音書15:22――

すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。

ここで、一人と一人との、あるいは、孤独と孤独との出会いが起こっています。

一方、カナンの女は、娘が重病で、よりすがれる人もなく、孤立していたことでしょう。他方、主イエスは、ファリサイ派・律法学者（マタイ12:14）の殺意はじめ故郷の人々や領主ヘロデの不信仰（マタイ13:53－14:12）に取り囲まれて、少し疲れを覚えておられたかもしれません。

女は恥も外聞もなく、ただ信仰（の萌芽）によって、主イエスに向かって叫んでいます。主イエスが女の住む地に退いて来られました。つまり、主イエスが一人の女のもとに「やって来ました」。そして、その女がその主に向かって「出て来て」近づいたのです。ここに、主イエスの来臨と人の接近、あるいは、主イエスの招きと人の応答が確認されます。女の身勝手な振る舞いではありません。

主の来臨と招きという上からの力が、この出会いの内に及んでいることは、カナンの女が主イエスに訴えかけた三つの言葉（15:22,25,27）からも証拠立てられます。先に、女が「ただ信仰（の萌芽）によって」と説明したのは、それらの霊的な証拠に拠っています。

- ①「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。」
- ②「主よ、どうかお助けください。」
- ③「主よ、ごもつともです。」（原文「はい、主よ」）

一目瞭然ですが、女の言葉は常に、「主よ」から始まっています。従って、それは、単なる悲痛な叫びではなく、祈りであり、信仰者の告白です。

そのような観点から①～③を捉えるならば、上よりの力により女の言葉に聖霊が宿っていると認められます。

元来、①「主よ、ダビデの子よ」は、聖書に精通しているユダヤ人が語るような正統的なメシア告白です。文字すら読めるかどうか知れない外国の女が、神信仰をまさに「口に入れられて」います。信じ難いことですが、聖霊の導きがあったとすれば、何事も不可能ではありません。

そして、①が「正統的なメシア告白」であることは、②「主よ、どうかお助けください」によって裏付けられます。「ダビデの子」なるイエス・キリスト（マタイ21:9）こそ「メシア」〈油注がれた救い主〉、私たちが助けを、また救いを求めることのできるお方です。

最後の③は、原文では簡潔に「はい、主よ」となりますが、女の祈りにおいて、主に対する「然しかり」、主への信頼が全うされていることが分かります。言い換えれば、「主よ、あなただけが勝利される栄光の主です。私の負けです」となります。彼女は③の言葉のみならず、実際に「イエスの前にひれ伏して」（マタイ15:25）いますから、主イエスに対するへりくだりは見事です。

このへりくだりに至るまで、カナンのの女は、①の後の主イエスの沈黙と弟子たちのおざなりの（病める子供のことを思いやらず「然り」なのか「否」なのかはっきりしない）物言い、そして、②の後の（しばしのことながら）「否」とも取れる主イエスの厳しい宣告（マタイ15:26）を乗り越えなければなりません。

彼女は祈り続けました。正確に言えば、聖霊が彼女の祈りを支え続けました。

マタイ福音書15:27——

女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

先の述べた通り、カナンのの女はここで、「はい（然り）、主よ」と、主の前に全面降伏しました。彼女は自分の内に、神から救いを要求できるような、何の功績も無いことを認めたのです。すなわち、「私はあなたの救いを受けるに値しない者です」ということです。

カナンのの女がへりくだり、「打ち砕かれ悔いる心」（詩編51:19）とも呼べる状態に至った時、彼女の心は解き放たれました。

厳格な言葉…「子供たちのパンを取って小犬にやっではいけない」…を発せられたばかりの主イエスに向かって、彼女は「しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」（マタイ15:27）と応じました。何という皮肉、何というユーモアなのでしょう。彼女の澄んだ目はまるで、主イエスの救いは、食卓〈主の晩餐〉〈聖餐式〉に在るということまで見通しているかのようです。

この「しかし」は、主イエスを尻込みさせるような屁理屈ではありません。そうではなく、主イエスの伝道を、意外な方向へ前進させる「しかし」でした。すなわち、主イエスと一人の女が交錯した「ティルスとシドン」の或る路地から、異邦人伝道が開始されたのです。

マタイ福音書15:28——

そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」 そのとき、娘の病気はいやされた。

「おお（ああ / 新共同訳では訳出されていません）、婦人よ」というこの一句には、主イエスの驚きが込められています。それは、父なる神が、御子であるご自身と共に、さまざまな人間を用いて進められる御業に対する驚きとも言えましょう。

「あなたの信仰は立派だ」とは、「あなたの信仰はメガトン級（広大）だ」との意味です。なぜ、主イエスがカナンの女の「信仰」をそのように言い表されたのか、私たちは一瞬戸惑うかもしれませぬ。

しかし、これは主イエスの宣言です。そうなのだ<sup>と</sup>受け止めるのが筋でしょう。まさしく信仰は、上より授けられるものです。今、女の「打ち砕かれ悔いる心」に、広大な信仰が宿りました。それは、満ち溢れこぼれるほどの神の恵みを受け容れる器として、まことにふさわしい彼女の信仰でした。実際に、彼女があずかった貴い「パン屑」は、三日後のパンと魚の奇跡の場面では、「残ったパンの屑を集めると、七つの籠いっぱいになった」（マタイ15:37）というように飛躍的に増大しました。

「パン屑」という神の恵みを、主イエスに食いさがって求めたカナンの女の広大な信仰を端緒として、広大な異邦人世界へ、そして今日、全世界へ、キリストを信じる信仰が告げ広められています。

コリントの信徒への手紙 二 1:19——

わたしたち、つまり、わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。

私たち信仰者は、この世と自分の罪性の中<sup>あ</sup>に在る「否」によって取り囲まれています。また、私たちは、「然り」とも「否」とも反応しない無頓着や無気力<sup>おお</sup>に覆われています。アーメン（まことにその通り）であり、「然り」である主イエス・キリストが再び地上に来られるまで、私たちは「アーメン、ハレルヤ」（ヨハネ黙示録19:4）と唱えつつ信仰の戦いを続けねばなりません。

最後に、この戦いの偉大な先人、宗教改革において苦闘したマルチン・ルターの言葉に耳を傾けましょう。彼は、まさに自分をカナンの女に重ね合わせています。

ルターの説教「カナンの女の信仰」の言葉——

私たちの心が「否」以外の何も聞かなくても、それは「否」そのものではないのです。それ故、あなたの心から一切の疑い、不安の思いを取り去り、しっかりと御言葉に信頼し、「否」

の上でも下でもよいから、深く隠されている「然り」をつかみとりなさい。女がキリストの正義を堅く信じて実行したように、それに頼りなさい。その時、あなたは御言葉によって、主をとらえ、勝利を得ます。

（『教会暦による日々の黙想—ルターの著作より—』、聖文舎）